

研究の窓

21 世紀の重荷

多分ハロルド・ラスキだったと思うが、「20 世紀は戦争と革命の世紀である」と述べた。実際、人類の歴史が始まって以来戦争と社会変革は絶えず繰り返されたが、20 世紀に入ってから、それらは、従来経験しなかったような大きな規模で行なわれた。世紀が変わって間もなく第一次大戦が勃発し、その末期にソ連の革命が起きた。世紀の半ば近く第二次大戦が始まり、その終りに中国や東欧諸国の共産主義革命が進んだ。その他、身近なところを顧みても、日露戦争・朝鮮戦争・ベトナム戦争など歴史を画するような事件もあった。

しかし、20 世紀後半は、やや平穏で、北半球を先頭にしつつ、多くの国々が経済の高度成長を遂げた。これは確かに救いであったが、もろもろの困難な問題を 21 世紀に先送りしている。

その 21 世紀を特徴づけるキーワードは何であろうか。私は当面、「21 世紀は環境悪化と高齢化の世紀」と呼びたい。戦後しばらく世界のエネルギーの前途が心配されたこともあった。しかし、その後、相次いで石炭・石油の鉱床が発見され、原子力発電も進められ、この心配は幾らか薄らいだ。そして、エネルギー問題以上に環境問題がクローズ・アップされた。しかも、エネルギー問題も、核廃棄物の処理の例を挙げるまでもなく、この環境問題と密接な関係にある。

1962 年に著わされた R・カーソンの『沈黙の春』や 1972 年に刊行されたローマ・クラブの『成長の限界』は、こうした環境の危機について警鐘を鳴らしたものであった。だが、その後も恐るべき勢いで環境の汚染や破壊は続いている。例えば、化石燃料や過去に蓄積された酸素を喰い潰して生み出されている CO₂ は、その増加を加速度化し、このままいけば地球の温暖化が進み、来世紀末には海面水位が 15 ないし 95 センチ上昇するのではないかと推定されている。熱帯雨林は毎分 29 ヘクタールずつ消失しているという報告も出され、生物の種が一日に一種ずつ絶滅しつつあるという警告も発せられている。

こうした状況下で、環境保護の種々な政策が国際的にも国内的にも企画され進められてはいるが、その効果が何時どのように現われるかは全く見通しもつかない。これは 20 世紀が 21 世紀に残す膨大な負の遺産である。

21 世紀が直面しなければならないもう一つの大きな難題は、急速に進む人口の高齢化である。2025 年頃には、今日の先進諸国の高齢化率 (65 歳以上人口/総人口) は、何れも 20% を上回るが、日本は高齢化の進行が格別速く、それが 25% 以上になると推定される。実数でいえば、その年、日本の高齢者人口は 3250 万人に達し、そのうち寝たきり老人が現在の倍以上の 230 万人くらいになるであろうと考えられている。

総人口のほぼ半数 (2025 年で 6300 万人ほど) の労働人口が中心となって、これらの高齢人口を支えてゆかなければならないのであるから、その負担は極めて大きい。具体的には、現在既に年金経済や医療経済の窮迫となって表われており、企業年金の中には破産するものも殖えている。国や自治体等もこれを放置できず、定年延長の勧奨、年金支給年齢の引上げ、年金の統合、社会

保険料の増額、消費税率の改定等々を考え、一部実行にも移している。

しかし、いささか手遅れであるとともに手緩くもある。年金だけをとっても、しばしば報道されているように、現在 40 歳以上の者は得をし 40 歳以下の者は損をすることになると計算されている。

社会科学上の予測には株価をはじめ困難なものが多いが、人口の高齢化などということは比較的簡単に、そして、かなり正確に予測できたはずである。しかるに、なぜもっと早く政策が推進されなかったのであろうか。それは、環境問題への対処が遅れたのと根を同じくする要因を持つ。

選挙民を気にする政治家や権限の保持と拡張に固執する官僚は、財政の累積赤字の削減や行財政改革よりも、目立つ積極的事業を興すことに力を注ぐ。彼らは環境の保護のような地味な仕事よりも、道路やハコモノを建設することを好む。(30 年前に故・大原総一郎氏は「建設という名の破壊」といって嘆いたが——。) また、彼らは、耳に心地よく響く福祉の増大については声高に喋っても、年金支給年齢の引上げとか社会保険料や税の増額についてはあまり語りたがらない。こうしたことが、問題解決のために打つべき手を先へ先へと延ばしてきたのである。勿論国民にも一半の責任はある。

だが、今や事態を正視しなければならない。さもなければ、21 世紀の人々の背負う重荷を益々耐え難いものにすることになる。

内 海 洋 一

(うつみ・よういち 大阪大学名誉教授)